

# その他

## 七カ年の軍務、

### 銃後も苦勞を共に

山形県 皿嶋正春

私は昭和十四年五月一日の現役で、弘前の騎兵第八連隊に入隊して、十六年七月關特演で馬と一緒に弘前から、黒河省の神武屯へ出発しましたが、その時、母が連隊まで会いに来てくれました。

大阪港で馬を船倉に降ろしたが、夏場の上に船の中は暑くて仕方ないので馬の鼻の所へ水の柱を立てておく、兵隊は馬の胴の下をくぐって歩いていました。

朝鮮釜山に上陸、鉄道は広軌道だから一車両に馬を

七頭ぐらい横に積んで、幾日も幾日も過ぎて神武屯着。八月だというのに霜がおりていた。

国境警備、神武屯勤務を昭和十七年の四月下旬まで、五月一日満期となって門司上陸、弘前で除隊したが、まだ桜の花が咲いていました。

一丸三カ年現役勤めでの帰郷、大東亜戦も緒戦に酔っていた時だし、家の人たちも随分喜んだことでしょう。

私の義父は召集になつて家にはいなかったが、母と妹と高等小学校へ通っている弟の三人でしたが、三人で三町歩近い田圃をよく耕作していたものです。

弟は十八年庄内の農学校へ入学したのだが、その前の十七年十一月に私に召集令状が来て、今度は弘前の野砲兵第八連隊に入隊しました。お陰で結婚の予定が

延びてしまい、二十年一月に召集解除になってから結婚しました。

その間、農学校にいった弟が予科練に入るよう勧められていたそうです。母は「正規の徴兵検査なら仕方ないが、弟を取られれば家がやって行けない。妹と母と二人だけだから」と頼みに行つて認められたというのですが、母は予科練に行けば特攻で必ず死んでしまうと思つていたようでした。

弟は二十年に検査を受け甲種合格となったが終戦になったので命を捨てずに済んだわけです。留守中、田圃も家から遠く二キロぐらいあつたし、用水路の足にも出なければならず、母が人足として出ました。母や妹が馬を使い、私の嫁も手伝つた。

話を戻して私の再召集のことですが、十七年十一月入つてから満州東安省宝清へ、騎兵第三旅団の無線通信教育隊に転属して十九年十二月までいた。

翌年一月召集解除のため、門司から弘前へ、兵舎に着いたのは午前一時ごろでした。床に入るか入らぬうちに非常呼集がかかる。何年振りかの大雪のため、青

森へ除雪作業、これが召集解除まで毎日で、一月六日頃でしたかやつと召集解除です。

七日、雪の積もつた中、汚れた軍服、ひん曲がつた軍靴を借りて営門を出て駅へと向かいました。汽車は発車時刻を二時間遅れて発車して、降り積もつた雪の中をのろのろと南へと進む。白沢駅か陣場駅にさしかつたころと思ひますが、向い合っている女の子が弱々しい声で泣き出した。母親の方は懸命にだめめるが一向に効き目がない。空腹らしい、話を聞けば二、三日は何も食べていないとのこと。それで母乳も出ないらしい。函館から連絡船に乗り青森に着いたが大雪のため、汽車は遅れる食物はなし、途方にくれている二人でした。食物といえは生スルメを持つているだけとのことでした。事情が分からない子供は消え入るような声で泣くだけでした。

子供を救つてあげたいと思つた私は、荷物の中から、何回となく厳しい検査を潜り抜けて持つて来たキャラメルを一箱取り出して、母親に渡しました。四角い飴が口の中へ入つたので、最初子供は不審な顔をしてい

ましたが、程良い餡の甘さが喉にしみ込んだのか、いくらか元気そうに見えて来ました。

夕方頃、汽車は秋田に着きました。別れ際に父親は「兵隊さんに娘の命を救ってもらった」と涙を流して、私に両手を合わせてお礼をいわれました。七十四歳の今日まで、両手を合わせて他人から拝まれたのはこれが初めてでした。内地の食糧不足が身にしみましたが、汽車は秋田駅を発車、夕暗くなって来て秋田県の小砂川駅まで来たが、その後は何時酒田駅に着くかわからないとのこと。

夕暗の中困っていたら、魚の行商の小母さんが「私が駅前の旅館に交渉してやる」とのことで、言葉に従って行ったら、旅館では心良く迎えてくれました。旅館には小学校の六年生の子供がいて、いろいろと軍隊の話を語り、大切に持ち帰ったキャラメルを一箱やつたら、次ぎの日は宿料はタダとのことでした。

お昼ごろ、懐かしのわが家に着きましたが、皆夢を見ていような心地のようでした。落ち着きを取り戻して、何よりも先ず、召集で遅れていた結婚式と親戚

を招集するにも配給制度で物資はなしということでした。知人の獲った魚を母が無理にお願いして分けて貰い、今から思えば猫の食事のようなお膳立てで、形ばかりの結婚式を終えました。

やれ安心と思う間もなく、防衛召集で郷土の守り、警備隊の分隊長として頑張っていました。雪も消え田の耕作、田植えも隣組の先頭になって終え、今日の豆播きを終わったら、明けて七月二日は休日にとしようと、豆播きの最中、九時ごろ古口村農業会に務めている親父が「豆播きは止めろ、召集が来た、三日に仙台に集合だ」と知らせに来た。

六ヵ月間地方の人となつて、また軍隊生活に戻るなら「現役志願していれば良かった」とつくづく悔やまれました。七月三日、午前七時〇分、古口駅出発、仙山線経由で仙台着つつじが丘の小学校へ入隊でした。

食事は麦飯はなし、大豆と高粱飯の毎日でした。若い兵隊達は士気旺盛だったように思われました。七月九日の夜、下士官だけが抜け出して銭湯へ行ったら、地方の方々が「今晚、仙台空襲がある。」との私語が

聞かれましたが、やはり午後十時ごろから空襲があり街の大方は焼けました。

私と某軍曹はどうせ死ぬなら何処でも同じ、と小学校の体育館の監視哨に登って見ていましたが、親子焼夷弾が炸裂する様子、生きた心地はしませんでした。

七月十三日夕方いよいよ出発、薄暮の中乗車、新しい軍服を着用しているのは下士官二十名だけ、兵隊たちの服装は古い軍服、地下足袋あり、わらじ脚絆、仮装行列さながらの出立でした。汽車は仙台を出発、磐越西線に入り、山の中で空襲警報が出て列車は停止。暑いので窓を開ければ蚊の大群に襲われる。車内では蚤に閉口でした。何とか列車は熊本に着き、輜重連隊の車庫の梱包毛布の上で二日寝泊し、演習廠舎に移りました。ここで編成が始まり、私は陸部隊第四中隊(中村隊)の無線分隊長となりました。

熊本県天草郡大矢野島大潟という部隊に解散(九月十日)まで駐屯することになりました。軍務とてほとんどなく、毎日が島民の援農作業で終わりました。武装解除とて兵器もなし、十月十四日帰郷しました。

―皿嶋さんは昭和十四年四月から二十年九月まで二回の解除はあっても家にいたのは一カ年ぐらい。軍務の連続でしたが、軍隊でも、初年兵の訓練、満州での軍務など、随分苦勞はあったと思うが、その苦勞は一言もいわれない。ただただ留守宅の家族のこと、車中の飢えに泣く子供のことなど、苦に耐え抜いた。平凡のようで、貴重な体験を聞かせて頂き、感謝します。